

の者四、五人がその空家をしらべに行つて、戸棚をあらため、床の下までも詮索したが、なんにも怪しいものを発見しなかつた。

そんな噂がひろがつて、その後は誰も借り手が無い。そうして、その空家には時どきにそのばあさんの姿がみえる。どこの幽霊が戸惑いをして来たのか、それはわからない。

その話を聞いて、彼はまた蒼くなつて、自分はその得体の知れない幽霊に取付かれたに相違ないときめてしまつた。家へ帰る途中から気分が悪くなつて、それから三日ばかりは半病人のようにはんやりと暮らしていたが、かのばあさんは執念ぶかく彼を苦しめようとはしないで、その後かれの前に一度もその姿をみせなかつた。彼も安心して、九月からは自分の持席をつとめた。

かのあき家は冬になるまでやはり貸家の札が貼られていたが、十一月のある日、しかも真つ昼間に突然燃え出して焼けてしまつた。それが一軒焼けで終つたのも、なんだか不思議に感じられるといふのであつた。

(二)

第二は十五夜——これは短い話で、今からおよそ二十年ほど前だと覚えている。芝の桜川町付近が市区改正で取扱

ないのかも知れないと思つたが、いづれにしても、迂闊なことをしゃべつて家内のものを騒がすのもよくない。そんな噂が世間にきこえると、自然商売の障りにもなる。かたがたこれは自分ひとりの胸に納めておく方がいいと考へて、家内のものにも秘して置いた。そうして、幾年を送るうちに、自分ももう馴れてしまつて、さのみ怪しまないようにもなつた。

ところで、今度ここを立退くについて、家屋はむろん取毀されるのであるから、この機会に床下その他を検めてもらいたい。あるいは人間の骨、金銀を入れた瓶のようなものでも現れるかも知れないと、その主人がいうのだ。成程そんなことは昔話にもよくあるから、物は試しにその床下を発掘してみようということになると、果して店の梯子の下あたりと思われるところ、その土の底から五つの小さい骨が現れた。但しそれは人間の骨ではない、いづれも獣の頭であることが判つた。その三つは犬であつたが、他の二つは貉か狸ではないかといふ鑑定であつた。いつの時代に、何者が五つの獣の首を斬つて埋めて置いたのか、又どうしてそんなことをしたのか、それらのことは永久の謎であつた。

二、三の新聞では、それについていろいろの想像をかいだが、結局不得要領に終つたようだ。(この項終り)

げられることになつて、居住者は或る期間にみな立退いた。そのなかで、或る煙草屋——たしか煙草屋だと記憶しているが、あるいは間違つてゐるかも知れない。——の主人が出張の役人に対してこういふことを話した。

自分は明治以後ここへ移つて来たもので、二十年あまりも商売をつづけているが、この家には一つの不思議がある。時どきに二階の梯子の下に人の姿がぼんやりと見える。だんだん考えてみると、それが一年に一度、しかも旧暦の八月十五夜に限られていて、当夜が雨か曇りかの場合には姿をみせない。当夜が明月であると、きつと出てくる。どこの隙間から月のひかりが差込んで、何かの影が浮いてみえるのかとも思つたが、ほかの月夜の晩にはかつてそんなことがない、かならず八月の十五夜に限られているのも不思議だ。人の形ははっきり判らないが、どうも男であるらしい。別にどうするといふでもなく、ただぼんやりと突つ立っているだけのことだから、こつちの度胸さえすわつていれば、まず差したる害もないわけだ。

この主人もいくらか度胸のすわつた人であつたらしい。それにもう一つの幸いは、その怪しいものは夜半に出て、明け方には消える。ことに一年にたった一度のことであるので、細君をはじめ家内の人たちは誰もそれを知らないらしい。あるいは自分の眼にだけ映つて、ほかの者には見え

ブラジル日系文学

新理事会(二〇一七—二〇一八年)

会 長	中田みちよ
副会長	小 齊 棹子・小池みさ子
書 記	古 川 恵子・武本 憲二
会 計	鈴 木 良子・鎌谷 昭
編集長(日語)	中田みちよ・宮川信之
編集長(ポ語)	井浦賢治エジソン
監事会	
正監事	宮村 秀光・柴門 明子
	小田 輝子
副監事	間島 章子・猪狩ちほルシ
	マリア・エレナ・マドウレイラ

*本年度から会費は年間二〇〇レイスと
なりました。よろしくお願いいたします。